

塚をめぐるフオークロア

—— 将門塚・道灌塚の分析を中心に ——

松崎憲三

はじめに

一 首塚と屍体分葬伝説

二 将門塚の信仰とその祭祀

(1) 将門伝説

(2) 将門霊神の復座

(3) 千代田区大手町の将門塚

三 道灌塚の信仰とその祭祀

(1) 伊勢原市の首塚・胴塚

(2) 伊勢原市の観光道灌まつり

結びにかえて

はじめに

考古学では「古墳墓」と「経塚」以外の人工の土盛りによつて形成された高まりの遺構（高さ2、3メートルから5メートル）を「塚」と称している。この種の「塚」は各地に分布するが、古墳と見なされて発掘が実施されることはあつても、「塚」の多くは遺構としての具体的要因が欠除するため、従来研究者の関心の埒外らちがいに置かれてきた。しかし、一九六七年に大場磐雄が「歴史時代における『塚』の考古学的考察」なる論文を草し、「塚」研究の重要性を説いて以降、高度経済成長の発掘ブームも手伝つて広汎な発掘調査、研究がなされるようになった。⁽²⁾一方民俗学においても、考古学の動向に触発される恰好で「十三塚」「富士塚」「行人塚」等の研究が近年なされている。⁽³⁾

ところで柳田國男は明治末から大正初期にかけて「十三塚」「塚と森の話」「七塚考」「耳塚の由来に就て」等々の「塚」に関する論稿を数多く著わしているが、大正七年の「民俗學上における塚の價値」なる論稿で以下のように主張している。⁽⁵⁾「一部學者中には、古墳と塚とは明白に區別の出来る様に考へて安心して居るものがある。是が第一に誤りであらう」、また「古物に熱心な人の眼から見ると、何物も埋藏されてゐない事は輕蔑の種であるかも知らず、意味不明なのは即ち無意味なもので濟まされるかも知れないが、自分等は之と反對に、それだから一層考へて見なければならぬと云ふ事を感じず

る」と述べ、さらに「見様によつては、古墳の方が築造の目的が明白であつて、研究の餘地もそれほど多くはないと言へる」とまで極論している。いずれにせよ、地名として残つてはいるものの、平にならされてしまつた塚も少なくない現状からの危機感と、先祖の信仰の有様を知る手がかりとして「塚」研究の重要性を主張したのである。一方近年では、平野榮次が『月刊考古学ジャーナル』に「塚の信仰」なる小論を寄稿し、民間信仰研究の観点から「塚」の持つ多面的性格と研究課題について論じている。⁽⁶⁾

民俗学でいう「塚」とは、一般に人為的に土を盛つて丘状に築き上げたものをさすが、石積により方形に築かれたものも塚と称している。その築造目的からは、墓として造られたもの、祭壇あるいは信仰対象の縮小版としてつくられたもの（例えば富士塚、信仰以外（九十九塚）野火止、もしくは境界を示す、典型は一里塚）の目的でつくられたものがある。さらには造立以後、本来の目的と異なる意味が付与されて祀られる、といったケースも少なくない。こうした点から庶民の信仰の軌跡を辿る上で「塚」は恰好の分析対象といえるのである。筆者は先に「行人塚再考」なる小論をしたためたが、⁽⁷⁾小稿では将門塚、道灌塚に焦点をあて、近・現代における信仰の実態をトレースしたいと思う。

一 首塚と屍体分葬伝説

首塚とは、戦乱あるいは処刑によつて斬首された者の首を埋めて祀つたと伝えられる塚で、家臣や身内の者が晒されていた首を奪い返して埋葬し供養したとする伝承や、夜な夜な白馬に跨つた首の無い武者が駆けていくの見える、といった首無し武者の伝承が伴っている場合も少なくない。また、その多くは崇りなどの俗信が伴っている一方、中には首から上の病に効験があるとされ、崇りが克服されて機能神として祀られるに至つたものもある。ところで『日本の首塚』を著わした遠藤秀男によれば、その所在を確認した首塚一〇六例は次のように分類できるとい⁽⁸⁾う。

1. 合戦による戦死者首塚
 - A. 姓名の判明する個人塚……三十七例
 - B. 多数合葬（群衆）塚……四十九例
2. 暗殺や要人の処刑首塚……十二例
3. 罪人（一般人）の首塚……五例
4. 人間以外の首塚……三例

この遠藤のデータによれば一〇六例中八一パーセントまでが合戦による戦死者の首塚ということになる。また遠藤は、『軍用記』『越後軍記』『三河後風土記』等々の多数の文献を繙きながら、中世の合戦における首のとり方、首付け帳の記し方、首実験の方法、首の処理方法等について詳細に論じている。そうして「首の怨霊信仰に発した鎮魂と祭祀も、その首に対する武人の思想や地元民の考え方によって、かなりの差異が見受けられる。その扱い方によって大別してみると次のような種々相があらわれている。」⁽⁹⁾としている。

一・個人の場合

(1) 首送り（相手遺族に送り返してやる例）

平敦盛・楠木正成・今川義元・香西宗心・龍造寺隆信・天草四郎など

(2) 敵方による祭祀例

清水宗治・三宅弥野・陶晴賢・木村重成・世良修藏など

(3) 盗み首（縁者によって盗まれ祭祀された例）

源頼政・木曾義仲・源実朝・新田義貞・鳥居元忠・由比正雪・小栗忠順など

二・群衆塚の場合

(1) 地元民の協力による祭祀や築塚

堂宇の建立や万灯による供養その他

(2) 討ちとった本人による祭祀供養

首供養（三十三の首をとった場合）

この遠藤の類型表には記されていないが、将門伝説も各地に種々伝えられており、その中には一の(3)、盗み首とするものもあることをつけ加えておく。

遠藤の『日本の首塚』は、我々に多くの示唆を与え貴重な書物であることは間違いないが、歴史的視点からの分析は必ずしも充分とはいえない。その欠点を補完してくれるのが黒田日出男の論稿「首を懸ける」である。黒田は『前九年合戦絵詞』『後三年合戦絵詞』『平治物語絵詞』といった中世絵画資料やさまざまな文献に分析を加え、戦場で見られる搔き首、処刑としての斬首、そして首の大路渡しと獄門に懸ける慣行の初見時機について次のように整理している。黒田によれば、搔き首は既に『續日本紀』天応元年（七八二）六月一日の条、『日本記略』延暦十三年（七九四）十月二十八日の条にあり、八世紀には戦闘状況下で行なわれていたという。また斬首は、律令の刑罰に「斬」とあり、『日本書紀』崇神天皇十年の記載に見られるという。そして生首の大路渡しと獄門懸けは中世成立期に登場するとする。尚、承平・天慶の乱における、平将門や藤原純友の首の処理にも言及し、『将門記』や関連諸史料によれば平将門の首は①藤原秀郷の使者によって運ばれ②首は『東市』の『外樹』に懸けて群

衆の目にさらされたのである」と述べた上で、市での処刑は人々の群集する所で見せしめのためになされたと説明されているが、そうではなく市神へ捧げる生贄の側面があるのではないかとすこぶる興味深い指摘をしている。⁽¹⁰⁾その後で黒田は同論文「軍神と生贄」なる項で『平家物語』や『宇都宮大明神奇瑞記』を援用しながら「中世武士達は、たんに自己の軍功を証明するためにだけ首を掻いたのでなく、八幡・鹿島・香取・諏訪を始めとする諸『軍神』を祝い、武運と戦勝を祈願・報賽するため『生贄』としての敵の『生首』を求めたのであるといえよう」と結んでいる。⁽¹¹⁾生贄・生首と軍神との関係については根拠となる史料を用いて論じているが、市神との関係は論証が不充分この上ない。しかし黒田説の検証は小稿の目的とする所でもないし、また筆者の力量を超えるため、ここでは黒田説を紹介するにとどめたい。

ところで首塚のように死者の体の一部を埋めたと伝える塚には胴塚、手塚・腕塚、足塚などがある。このことと関連して柳田は「一目小僧その他」の中で「死屍を分割して三つ、七つの塚に埋めたといふ口碑は、大抵は山と平野、もしくは二つの盆地の境などに発生する。密教の方にはこれを説明する教理も出来てゐるらしいが、要するに無類の惨劇を標榜して、外より来り侵す者を折伏する趣旨に出たものらしく云々」と述べ、屍体を分割して埋葬する習俗を境塚との関連で論じている。⁽¹²⁾また「七人塚考」においても殺戮された七人の御霊を（あるいは人間を四肢と首・胸・腹の七段を分割して）以て境に祭る神なりとするのが上古からの思想で、七星の剣先を以て害敵を征服しようという北斗の信仰

に基づいているとし、七人塚についても境塚との関連で論を展開している。⁽¹³⁾

これに対して中山太郎は『補遺日本民俗学辞典』「屍体分葬伝説」の項で各地の伝説や『崇峻紀』『日本書紀』記載の鳥取部萬の顛末を引き合いに出しながら「我國の古代では、反逆人又は獷猛なる人物の屍骸を、其まゝに葬ると怨靈となり祟りをなすものと信じ、之を支解して幾ヶ所かに分葬する習俗があつた」と結論し、柳田と異なり、御霊の慰撫に力点を置いた見解を述べている。⁽¹⁴⁾

塚の空間的位置については歴史的变化もふまえ、検討してみる必要がある。また中山説については後ほど言及するつもりである。いずれにせよ将門塚、道灌塚ともに屍体が分葬されていると見なされているものである。

さて、研究史の整理はこれくらいにして、先ず将門塚の検討に入ることにした。

二 将門塚の信仰とその祭祀

(1) 将門伝説

本章の目的は、千代田区大手町の将門塚をめぐる信仰とその祭祀を分析することにある。将門伝説についての歴史的解释、あるいは地域的特徴については、梶原正昭・矢代和夫共著の『将門伝説』に詳しく論じられている。⁽¹⁵⁾ここでは同書によりながら将門伝説の概要を紹介し、その上で千代田区大手

町の将門塚関連の伝説のみ取り上げることにはしたい。

将門伝説は北は青森県津軽郡五所河原市から西は広島県高田郡丹治比村まできわめて広い範囲にわたって分布しているが、将門伝説は大きく二つの系統に整理することができるという。一つは将門調伏の靈異を語るもので、神仏靈驗譚や高僧達の法威譚として、主に京都を中心に語り伝えられてきた。しかし関東でも成田不動や足利市の鶏足寺のように調伏伝説を持つ寺社がある。もう一つは、将門の超人性を強調するもので、鋼鉄身の巨人伝説や妙見信仰と結びついた「七人将門」の伝承など東国各地に広められ、やがて将門は御霊神として神に祀られるようになった。ただし、藤原秀郷が下野南部に根をはる富豪（私営田領主、つわもの）だっただけに、栃木県南部地方においては、将門よりも秀郷に関する伝説が圧倒的に多い。この点については、同書をもとに分布図を作成した結果明らかとなった（図(1)参照）。また奥多摩や秩父などの東京・埼玉の山間部から東北地方にかけては、将門の妻子・兄弟にかかわる落人伝説が多く残されているという。

ところで、福田豊彦によれば、志半ばにして倒れ、非業の死をとげた英雄ほど伝説が多く、しかもその伝説は次第に拡大されるのが常であり、その最後の場面から先ず伝説化が進められるという。⁽¹⁶⁾ その意味で先ず『太平記』の記す将門最後のシーンを⁽¹⁷⁾見ることにしたい。

朱雀院ノ御宇、承平五年ニ、将門ト云ケル者東国ニ下テ相馬郡ニ都ヲ立、百官ヲ召仕テ、自ら

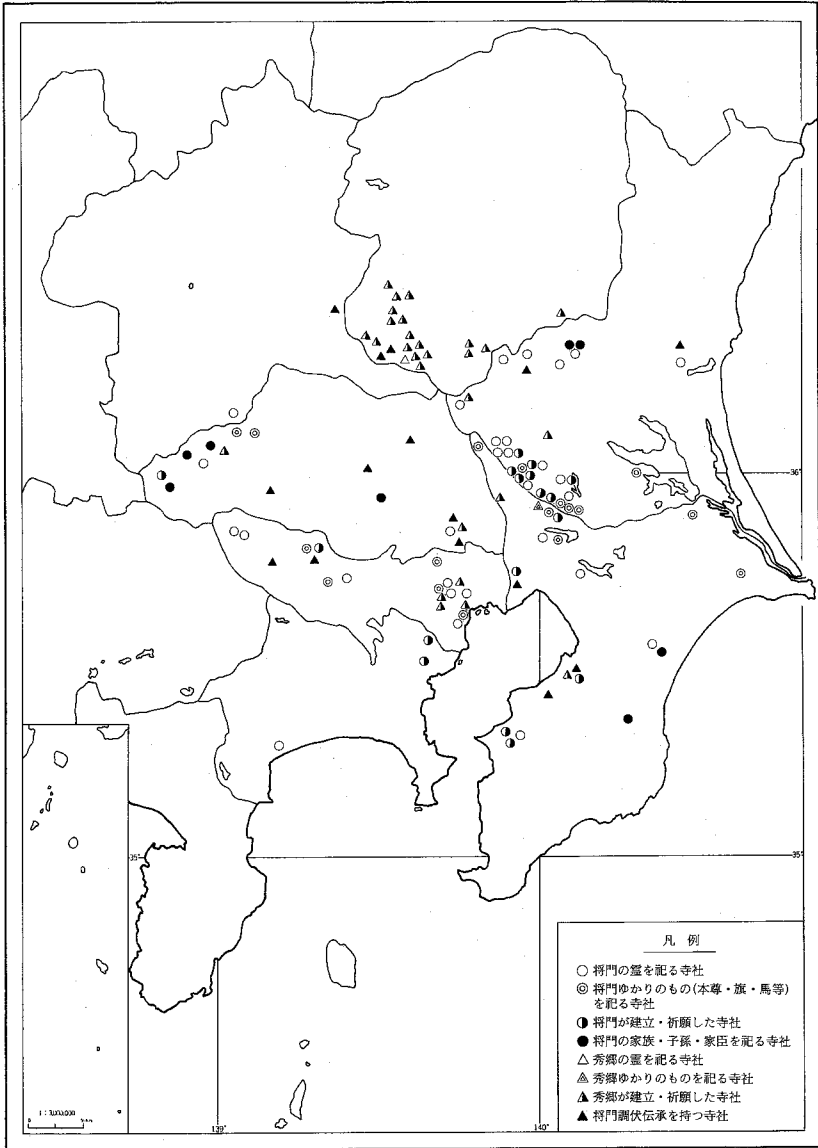


図1 将門を祀る寺社の分布 (関東地方のみ『将門伝説』より作成)

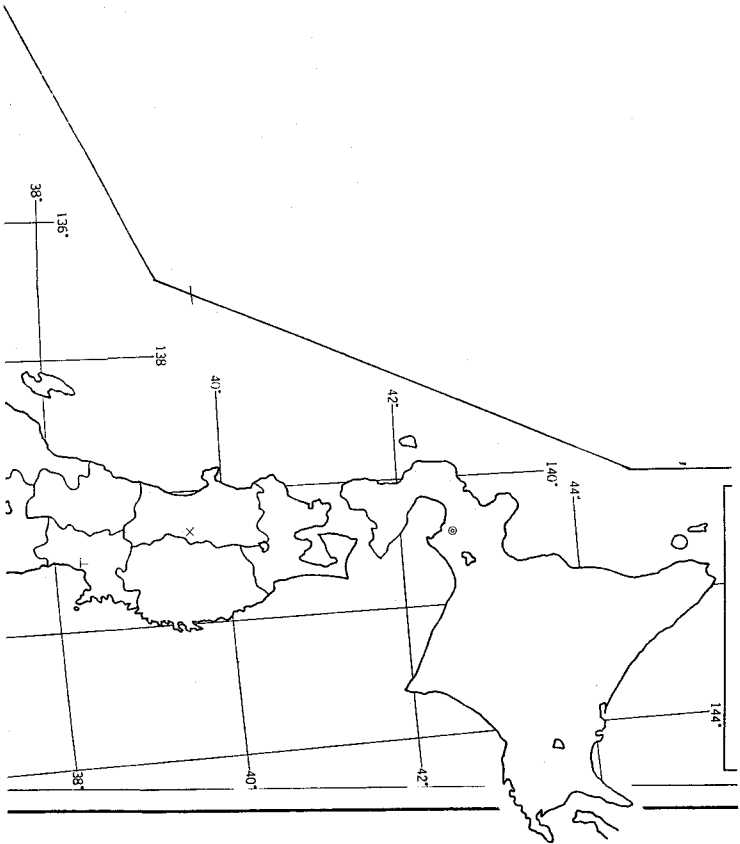
平親王ト号ス。官軍拳テ是ヲ討タントセシカドモ、其身鉄身ニテ、矢石ニモ傷ラレズ、劍戟ニモ痛マザリシカバ、諸卿僉議有テ、俄ニ鉄ノ四天ヲ鑄奉テ、比叡山ニ安置シ、四天合行ノ法ヲ行セラル。故天ヨリ白羽ノ矢一筋降テ、將門ガ眉間ニ立ケレバ、遂ニ依藤太秀郷ニ首ヲ捕ラレテケリ。其首獄門ニ懸ケテ曝スニ、三月マデ色不レ変、其眼ヲモ不レ塞。常ニ牙ヲ嚼テ、「斬ラレシ我五体、何レノ処ニカ有ラン。此ニ来レ、頭続デ今一軍セン」ト、夜ナ夜ナ呼リケル間、聞人はヲ不レ恐事云事ナシ。時ニ道過ル人はヲ聞テ、

將門ハ米カミヨリゾ斬ラレケル依藤太ガ謀ニテ

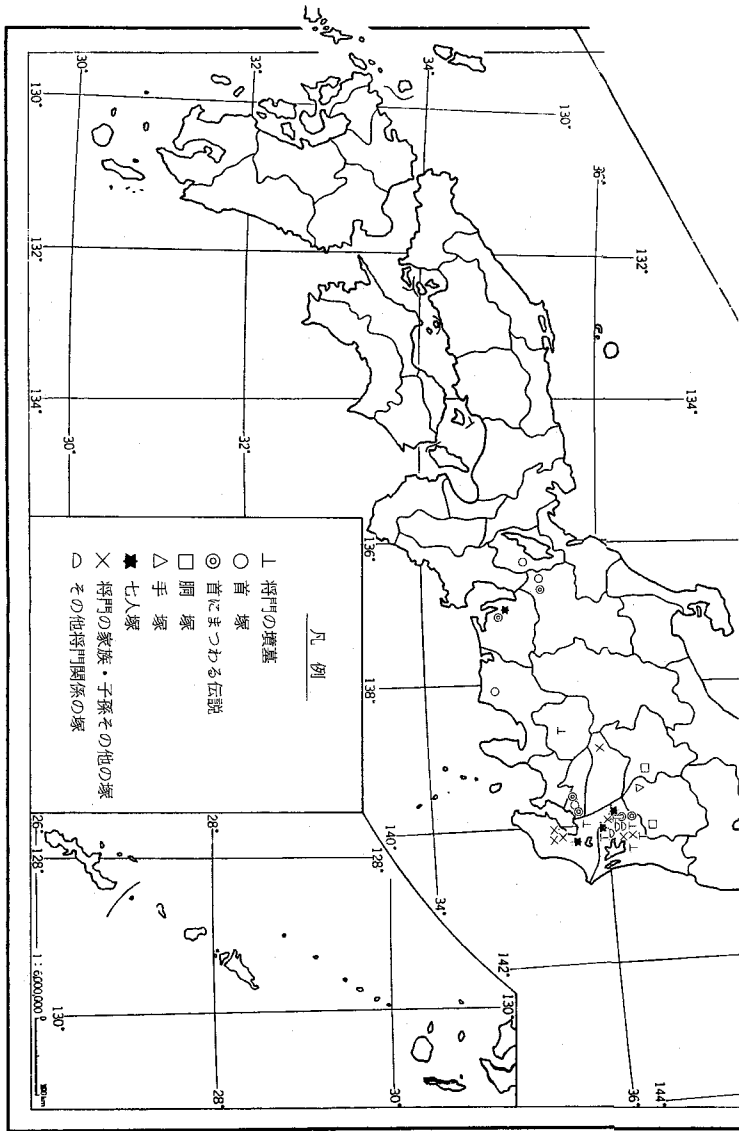
ト読タリケレバ、此頭カラカヲト笑ヒケルガ、眼忽ニ塞テ其尸遂ニ枯ニケリ。

將門の身体は不死身の「鉄身」で唯一の弱点は米噛みだけでそこに矢が当たったとされており、これが將門伝説の一つの基調となっている。同様の表現は「平治物語」にも見られるが、十三世紀以前のものには將門の米噛みに矢が当たったという記述は見当らず、この狂歌は將門唯一の弱点である米噛みと討手の依藤太の名前をかけて創作されたものと見なされている。⁽¹⁸⁾天慶の乱は歴史的にも類例の少ない衝撃的事件であり、それだけに多くの人達の関心呼び、さまざまな伝承が産み出されていたが、そうした中で將門の超人ぶりを示すもう一つの話は、その首をめぐる怪異譚である。その一端は先に紹介した「太平記」の一節にも記されていたが、そのほか例えばその首の入洛に際して、將門

図2 将門家関連伝説の分布
(『将門伝説』より作成)



塚をめぐるフォークロア



の軍勢が攻め上つて来たというデマがとび、都中が大騒ぎになったと伝えられている。また梟首きやうしゆされた将門の首はいつまでも目を閉じず、見る者を怖れさせたといわれ、また獄門をぬけ、骸むくろを求めて東国に飛び帰り、力尽きて、あるいは矢で射落とされて落ちたというように、さまざまな伝承がつくり出されている。東京都台東区鳥越二丁目の鳥越神社はその首が飛び超えた所、現千代田区九段一丁目の津久戸明神は矢を射立てられた首が力尽きて落下した所、千代田区大手町の将門塚がその首を葬った所などと言い伝えられている。首塚はこの他にもあり、岐阜県不破郡矢通村は東国に飛び帰る将門の首を射通した場所で御頭神社はこの首を祭ったところという。滋賀県愛知郡の將軍塚も落ちた首を葬った所と伝えている。首が胴体を求めればそれに対応する手や腹を葬ったとする神社もあり、栃木県足利郡の大手神社、大原神社がそれである。

将門の屍体分葬伝説に対応する形で、将門の鎧・冑を埋納したとする神社が東京にある。新宿区北新宿三丁目の鎧神社と中央区日本橋兜町の兜神社がそれにほかならない。

『江戸名所図会』巻の四に、

鎧明神祠 田照寺の良うしろの方にあり。田照寺の持もちなり。相伝ふ、藤原秀郷将門を誅戮ちゆうりくし凱陣の後、将門の鎧をこの地とこに埋蔵し、上に禿倉ぼくらを建てて鎧明神よろいあきみと称すといふ。社前に兜松かぶまつと称ふる吉松あり。これもその兜を埋めたる印しるしと云ふ。

とある。⁽¹⁹⁾ここに記された円照寺(真言宗)は、秀郷ゆかりの寺院である。また織田完之の『平将門故蹟考』には、

兜神社は日本橋兜町にあり、地名起これるは元此の地甲山と称し、田原藤太が平将門の兜をここに埋めたりと伝え、今兜神社と唱え、渋沢敬三男爵邸の東、楓川に沿って小祠あり。

と記されている。⁽²⁰⁾

都内には兜神社、兜塚と称するものが少なからず存在するが、日本武尊あるいは八幡太郎義家が納めたとする伝承が伴っていないも、将門との関連をつけられているのは日本橋兜町のそれだけである。

尚、次節以降で検討を加えようとする千代田区大手町の将門塚、及び千代田区外神田の神田明神の由緒について『江戸名所図会』⁽²¹⁾は次のように託している。

神田大明神の旧地 神田橋の内、一橋御館の中ひつばしおんやかたにありて、御手洗みたらしなど今なほ存すとなり(隔年

九月十五日、祭礼の時は神輿をここに渡し奉りて、奉幣たじげんのすけの式あり)。この辺、旧名を芝崎村しばさきむらと云ふ(小田

原北条家の古文書に、太田大膳亮所領の中、江戸芝崎一跡と云ふ名を註せり)。その昔は浅草の日輪寺にちりんじも芝崎道場しばさきどうじょうといひてこの地にありしなり。また神田なつと号なづくる事は、伝へ云ふ、往古諸国そのかみ、伊勢

大神宮へ新稻にしなを奉るゆゑに、國中その稻を植うるの地ありて、これを神田かんだあるいは神田・御田みたと唱へしとなり。この地は当国の神田しんでんなりしゆゑ、大己貴命おほみちのみことは五穀の神なればとて、ここにいづま齋りて神田明神かんだみょうじんと号なづけ奉りしとぞ。

神田大明神社かんだだいめいじんじや 聖堂の北にあり、唯一ゆいいちにして江戸総鎮守と称す。

祭神 大己貴命おほみちのみこと・平親王将門の靈へいしんおうまさかど 一坐

社伝に曰く、人皇四十五代聖武天皇の御宇、天平二年の鎮座にして、そのはじめ柴崎村しばさきむらに（その旧地神田橋御門の内にあり）ありし頃、中古荒廢し既に神燈絶えなんとせしを、遊行上人二世真教坊、東国遊化ゆうげの砌みきりここに至り、将門の靈を合はせて二座とし、社の傍に一字の草庵をむすび、芝崎道場と号す（今の浅草日輪寺じりんじこれなり）。その後慶長八年当社を駿河台するがだいにうつさされ（その頃日輪寺は柳原にて地をたまふ）、元和二年また今の湯島にうつさせらる。そのまま旧号を用ひて神田大明神と称す（神主は代々柴崎氏なり）。

近世の諸文献に同工異曲の内容が記されているが、これにより地名としての神田の命名の由来と遊行上人二世真教坊が荒廢していた神社を再興し、また当時祟りをなした村民を苦しめていた将門の靈を祀り込め、傍に草庵を結び、これが現在浅草にある日輪寺の前身であることがわかる。いづれにせよこの由緒に沿って、現在九月の彼岸中に行なわれる塚前祭には、日輪寺の住職が招待されるし、神田

明神の祭礼に際しては隔年に宮神輿が将門塚まで赴くことになっている。

(2) 将門霊神の復座

中山太郎の「将門の首塚」なる論稿に、次のような記載がある。⁽²²⁾

明治四年に、教部省から、神田明神の氏子に對して、神田明神は従來平將門を祭るとあるが、將門は叛臣であるから、神として崇敬すべきものでない。爾來祭神を、大己貴命・少彦名命の兩神と改めるから、左様承知すべしといふ沙汰があつた。然るに、血の氣の多い神田ツ兒は、此の沙汰を奉ぜず、叛臣か逆徒か、そんな事は知らぬ。先祖代々氏神様として、拜禮して來たものが、明治になつてから、崇敬出來ぬといふ理窟はない。教部省でそんな理窟を言ふのなら、神田ツ兒は別に神田明神（將門を祭神とした）を拵へると言ひ出して、面倒な事態を惹き起した。そこで、當時の松田東京府知事が仲裁に入り、(一) 神田明神の祭神は教部省の言ふ如く改めること、(二) その代り新に將門神社を攝社として設けることの條件で、手打になり、大正十二年の震災までは、本社に並んで攝社の將門神社が存在してゐたものである。

大變興味深い一件であるがさりげなく記され、しかも何の資・史料も示されていない。『神田明神

史考』によれば、明治五年に教部省から神田明神の祭神（二の宮）平将門靈神に対して異議が伝えられたという。中山の明治四年とは一年ずれるが、いずれにせよ明治の初期教部省から将門靈神の祭神廃止論が一方的に申し渡された。これに対して神社側は明治六年十二月十七日、東京府知事大久保一に対して次のような願書を提出した。⁽²³⁾

本社会殿平将門靈神は、旧地芝崎村鎮座之頃別殿なりしことは、神社啓蒙に将門靈神之祠本殿を去ること百歩と見えたるにて判然たり。全く慶長年中、神田台に遷座の時より合祀の趣、社記にも相伝有之候。其後徳川二代・四代等の節、追々当社信仰に付寛永中朝廷に奏請して勅使参向勅勤を被免たりと云事、或書に相見候。未だ正確なる^{よりとろ} 抛^{はな}は不存候得共、然る事可有之歟。何様程々衆庶の信仰も有之、神験も之有、数百年來崇敬之儀に候えば、今更廢置等を可論には無之候え共、素々^{もともと}別殿なりし上、大穴^{おほあな}牟遲^{むぢ}大神と相並べ合祭仕候事如何にも所憚^{はば}有之候儀と奉存候間、断然今般旧儀に復し、本社之側へ別殿を造営遷座奉り、須賀八雲三社同様撰社として、神饌奉撤等は尚従前の通り日々奉仕可致に付ては、本社御迹へは更に少彦名命を合祭仕度奉存候。此兩神は相並びて天下經營医道迄定置給える神代古伝も有之候儀に付、^{かたがた} 旁右之通奉齋仕度と奉存候。右兩条御差支之儀も無之候えば、御許可有之度奉願候也。

明治六年十二月十七日

神田神社祠官 本居豊穎 印

一方、教部省は、翌七年二月八日『新聞雜誌』に「府下神田神社、平将門ノ靈位除却ニ付、教部官員某議案」と題する反論を寄せた。⁽²⁴⁾

本朝上古ヨリ叛名ヲ豪ル者ナキニシモ非ズ。童稚ノ駭心ヨリ起リテ大逆ヲ成ス者アリ（眉輪ノ如キ是ナリ）。或ハ二己ノ憤怒ヨリ出デ、其ノ跡朝敵ニ当タル者アリ（広嗣等ノ如キ是ナリ）。是全ク叛逆ノ臣ト称スベカラズ。惟非望神器ヲ覬覦スル者ハ、天地ヲ窮メ古今ニ亘リ賊臣平将門一人而已（道鏡ノ逆志猶神勅ヲ奪ウ事能ワズ）。輦轂ノ下、将門ノ靈ヲ祭祀シ、衆庶信仰シテ敢テ怪マザル者独リ何ゾヤ。一時里人異靈ヲ恐レ、堂内ニ安置スルモ、今日文明ノ時ニシテ此ノ如キ逆祀アルベカラズ。条理明哲ニシテ処分スルハ教部ノ任ナリ。衆庶ノ蠱惑ヲ氷解シ、循々トシテ能ク教化スルハ教導ノ職ナリ。本居氏出願ノ如ク撰社ニ造立シ、須賀・八雲ノ社ニ列ス。：是ニ由リテ之ヲ觀レバ、断然除却ノ処分可然歟。：況ンヤ大逆無道九百年前ノ朽骨其ノ靈魂已ニ散ズ。：因循苟且之ヲ社域ニ置クベケンヤ。若シ陰忍シテ之ヲ置カバ、四海万国本朝ヲ何トカ云ワン。天下後世教部二人ナシト云ワン。決シテ諸神ニ列スベカラズ云々。

こうした教部省の強硬姿勢にもかかわらず、東京府知事は五日後の明治七年二月十三日、神社側の意向を認め、将門靈神を摂社に下すことが認められた。神社側は早速将門神社の建築に着手し、明治十一年によくやく竣工し遷座祭が盛大に行なわれた。こうした顛末に対する庶民の反応はどのようなものだったのだろうか。明治七年九月十四日の『郵便報知新聞』は次のように伝えている。⁽²⁵⁾

神田明神社は先頃祀典を正され、旧来の祀神を逐斥し、新たに大口貴（少彦名命の誤り＝筆者注）を移して、本社祀神と改定ありしより、氏子一同人心涣散し、例祭期日既に近づくと雖も、誰ありて事を挙行する者無く、剩え神主柴崎を始め氏子中、千百年來衣食豊瞻安楽富有せしは、全く氏神の恩恵なるを忘却し、朝廷に諂諛して神徳に負きし事の人非人なりとして怨み誹り、一文錢を投ずるも快しとせず、却つて旧神の新社別構の為に釀金既に千円に近しと聞きあり。

将門靈神に移祀されてしまった本社の祭りに目もくれず、新たに建設予定の将門神社のためにのみ寄進する、という行為の中に人々の心情が如実に表われている。ところで、神社側の妥協案の提示と東京府知事の仲裁により教部省との対立は一件落着いたかのように見えたが、社殿に掲げてある「神田大明神」の神号額をめぐってトラブルがおき、結局、時の太政大臣三条実美の染筆による「神田明神」の額を掲げ直すことで決着し、双方の修復をはかるためか、新政府に対する感情の悪化を恐れた

か、明治天皇の神田明神行幸が急きよ実行された⁽²⁶⁾。しかし、この問題のため以後十年間九月の祭礼は中止の浮き目にあうこととなった。

そうして、明治十七年に祭礼はようやく十年振りに復活した。十年振りの祭礼ということで、山車も四十六台が勢揃し、盛大に祭が敢行される筈であった。しかし台風の襲来により山車の大半が破損し使いものにならなくなってしまった。明治十七年九月十六日付『時事新報』は、人々の活気に満ちた祭の準備状況と台風による惨劇を伝えた後、次のように論じている。⁽²⁷⁾

明治初年朝敵論の喧しき際、ヨセバよいのに神田明神の神体にまで難癖をくっ付け、将門様は末社に御牢舎、其の代わりの神体には遙々常陸国鹿嶋郡磯浜村大洗の浜辺より大己貴命（少彦名命の誤り）筆者注を迎え来たりて、相替わらず神田明神と勧請し奉りたり。ソコテ先主人将門様は大立腹、己れ左捻じの素町人めら、我三百年鎮守の旧恩を忘れ、将門は朝敵ゆえに神殿に上はずべからずなどとして末社に追い退けたるこそ奇恠なれ、ヨシ／＼今にもあれ目に物見せて呉んずと時節を待つ甲斐もなく、隔年の祭礼は申訳計りの子供だまし、神力を費やすほどの値打ちもなかりしに、今日という今日こそは大江戸の昔に劣らぬ大祭礼、待ち設けたる将門様は、時こそ来たれりとして日本八十余州より数多の雨師風伯を駆り催し、大事の／＼十四日の宵宮よりして八百八町を荒れ廻わりて折角の御祭りメチャ／＼に致されたるなり。一寸の虫に五分の魂あり、況ん

や将門大明神様をウカ／＼朝敵喚ばわりして跡で後悔し玉うな…

九二

庶民の将門霊神へ寄せる思いと教部省（政府）の対応への憤懣やるかたなきが、筆に乗り移ったかのようなタッチで、しかも軽妙に描かれている。庶民の気持が見事に代弁された記事といえる。

問題の別殿の将門神社は、中山が記したように大正十二年頃までは存在した。関東大震災によって消失したのだろうか、その点のはっきりしないが以後は本殿内の一隅に祀られていたらしい。そうして、将門霊神が本殿の主祭神として元通り祀られるに至ったのは、明治七年から百年余り経過した昭和五十九年のことである。氏子総代の一人である遠藤達蔵氏によれば、「戦前までは何となく将門は朝敵という意識があつた。戦後新しい世の中になって、そうそうほとほりもさめた。そう思つて遷座に踏み切つた」という。満を持してというべきか、長い間伏流していた氏子達の願いがようやくかゝつた訳であるが、明治初期の教部省とのやりとりから一世紀以上を経過している。こうした氏子に象徴される庶民の忍耐強さには頭の下がる思いがするし、彼等の時間認識のはかりしれなきにはただあきれるばかりである。また、都内の将門伝説関連神社では新宿区北新宿の鎧神社、千代田区九段の築土明神等も明治七年に将門霊神を末社に遷している。他の関連神社もおそらく同様の処置がとられたものと思われる。ただ鎧神社の方は戦後宗教法人令の施行とともに逸早く復座を果たしている。築土明神については不明である。

朝敵将門の位置づけは歴史学者達の間でも時代とともに揺れ動いてきた。その点に関しては佐伯有清他編の『研究史・将門の乱』に詳しい。⁽²⁸⁾ 以上見てきたように為政者側には政治的状況如何により将門を祀る神田明神への対応に変化が見られた。そうした為政者と庶民との対立・葛藤、庶民の信仰の実態を知る上で、将門霊神遷座問題は恰好のテーマを提供してくれたといえよう。

(3) 千代田区大手町の将門塚

明治維新以降、旧来の武家屋敷は新政府の庁舎となるものが多かった。将門塚のある酒井雅楽頭の屋敷跡に、明治二年大蔵省が設置されたが、当時の将門塚の様子について織田完之の『平将門故蹟考』⁽²⁹⁾ は次のように伝えている。

大蔵省玄関の前に古蓮池あり、由来是を神田明神の手洗池なりと伝ふ。池の南少し西に当たり将門の古墳あり、高さ凡そ二十尺廻り十五間許、(中略)塚前の東二間許に礎石あり。幅七尺長九尺許、中心に今は古石燈籠を置く此物は昔塚前の常夜燈にてありしならん。此礎石は真教上人の蓮阿弥陀仏の諡号を刻せし板碑を此の上に立たりし事は疑ふべくもあらず云々。

しかしながら、現存するのは塚の傍にあった礎石と石燈籠にすぎず、大正十二年の関東大震災によ

図3 明治期の将門塚（『平将門故蹟考』より）



つて大蔵省庁舎ともども灰燼に帰してしまつた。大蔵省は焼跡の整理に際して、蓮池を埋め立て、崩れた塚も平らに整地してしまふのだが、その時工学博士大熊喜邦氏に依頼し発掘を試みた。その結果古い石室と近世のものと思しき瓦・陶器の破片が出土したという。またかつて盗掘された痕跡のあることも確認されたが、これといった遺物はなかつた。発掘調査後、塚は再び整地され、そこに仮庁舎が建てられた。しかし間もなくこの庁舎を中心に執務する役人の中から病人や怪我人が続出し、幹部に死人が出るに至つた。そうしていつしか首塚の崇りとの噂が広がり、庁舎を取り壊すのみならず、盛大な鎮魂祭を執行することになつた。

昭和三年三月二十七日付『東京朝日新聞』「将門の霊よ この通り謝まる 大蔵省のお役人連がおち氣ふるつて鎮魂祭」と題する記事によれば、その様子は次の如くであつた。⁽³⁰⁾

帝都の眞ん中、しかもいかめしいお役所で、昔ながらの怨靈鎮めの祭が行はれる、その話
 はかうだ、震災後大蔵省では、どういふものか病人が續出して、早速藏相、矢橋營繕管財
 局 工務課長その他十數人が現職のま、でなくなつて行く、數字には冷靜で遠慮なく各省豫算
 を天引する役人も、生命だけには神經過敏になつて、算盤をはじいた結果、どうも是は將門の怨
 靈のせいらしいと衆議が一致した、今の大蔵省敷地は、元神田明神と淺草日輪寺のあつた所
 で、震災前までは、その中庭に平將門の首級を祭つてゐたが、震災後バラツクを建てる時に、



写真1 将門塚（東京都千代田区大手町）

首塚を今の主計局の縁の下にたき込んで、毎日靴でキウく踏みつけて居た、これには怒るのもつとも、二十七日午後四時省内第二食堂を祭場とし、神田明神社司祭の下におごそかな鎮魂祭を行ふことになり、更に來月十四日には、藤澤遊行寺の高野管長を招いて、日輪寺で法要を営み、大藏省役人一同『今後どうぞよろしく』と参拝のはずである。

昭和三年三月十五日付『報知新聞』も『怖気づいた将門の亡霊大法會』と題する記事を掲載し、『大藏省が国費を投じてお門違ひの法事をやらうといふには奇々怪々 昭和怪談『将門のたゝり』がある、役人の首を切る事大根を切る如き大藏省のお役人も将門の話になると首をす

ほめておびえきつて居る」といささか揶揄気味に報じている。⁽³¹⁾ いずれにしても、以後慰霊祭は例年の行事として大蔵省で続けられた。ところが、さらに昭和十五年六月二十日、大蔵省本庁に落雷し、主要な建物はことごとく炎上してしまった。しかも落雷の場所が将門塚付近であったことから、将門霊神の祟りということになり、この時は河田烈大蔵大臣の指示で慰霊祭が盛大に挙行された。奇しくもその年はちょうど将門没後壹千年目に当たっていたという。

また、戦後アメリカ軍が進駐しモータープールの建設を進めていた際、ブルドーザーの運転手と作業員二人が突然の事故で死亡した。原因を糾明していくと、そこが将門の首塚であることが判明し、米軍と地元の人々との折衝の結果保存されることになった。⁽³²⁾

以上のように、明治の祭礼復活時、関東大震災後、昭和十五年の落雷時、戦後のモータープールの建設時と、将門霊神の排斥、あるいは将門塚崩壊の危機に際して、必ずといって良いほど天変地異あるいは災禍が発生し、しかもその災禍が将門の怨霊の祟りと認識され、盛大な供養祭を執行することにより祟りの解消がはかられてきた。また昭和三十五年には史蹟将門塚保存会が結成され、昭和四十六年には都の文化財に指定された。こうして見ると、宮本袈裟雄が指摘するように、⁽³³⁾ 将門の霊が祟る、という祟り観念こそが、首塚の保存・維持に大きな役割を果たしてきたと思われる。

ところで、「史蹟将門塚保存会」の構成メンバーには会長長渡辺武次郎（三菱地所株式会社会長、副会長遠藤達藏（神田明神氏子総代）、会員神田神社氏子および一般崇敬者三百人余りの他、日本長期信用

銀行、三井生命保険相互会社、三井物産株式会社、物産不動産株式会社、株式会社三和銀行、大洋漁業株式会社、株式会社あさひ銀行、竹中不動産、そして三菱地所の九社が参与法人として名を連ね、将門塚の管理保存に重要な役割を果たしている。近代合理主義のシンボルとしての企業が、神社や墓を所有し祭祀を執行したり、地域神社の祭祀に積極的にかかわるなど一方では非合理的な側面を持つことはしばしば指摘されているが、都市の祭礼や現代の信仰の維持に企業はもはや欠かせぬ存在になつているといえよう。

将門塚周辺の土地は、大蔵省から東京都に払い下げられ、さらに、先にあげた各企業に払い下げられた。そうして塚の周りに巨大なビルが建設される都度に、ここでも将門の崇り伝説が次々と生まれつつあった。企業がビルを建設するに当たっては必ず着工前と竣工時に慰霊祭を行なつていふという。およそ三十年ばかり前に三井物産ビルの設計に当たつて都に将門塚買収の申請書を提出した。しかし、社内から「崇りがあるといけない」との反対意見が出、半年後に取り下げられた。またビル建設工事が二年半で完了する予定だったが、法規に接触するなどで一時工事が中断され、大幅に遅れた。それについても、「将門塚を買い取ろうなどとしたせいだ」と噂になり、法的不手際に帰因することが明らかなのにもかかわらず、将門の崇りと結びつけて解釈しようとする傾向が強かった。この辺では三井物産ビルが最後に建設されたが、そんな経緯もあって、「以来三井物産は将門塚、神田明神の一番の信者になつた」と言われている程である。数年前、三井物産の若王子氏がフィリップンでゲリラに

塚をめぐるフォークロア

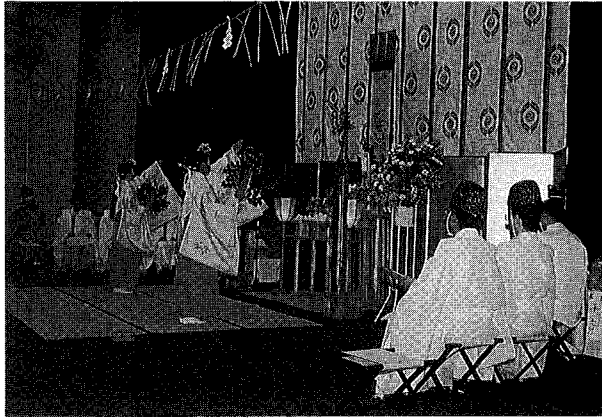


写真2 将門祭における巫女舞（三和銀行講堂にて、1994年9月）

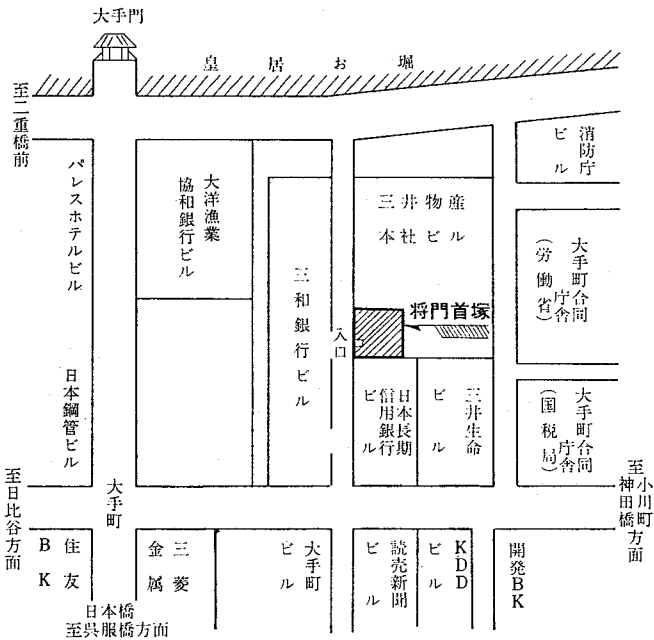


図4 将門塚附近略図

誘拐された時には、神田明神へ救出の願掛けをし、また将門塚に石像のガマガエル（若王子氏が帰るよ
うに祈って）が奉納された。こうした行為に、その一端がうかがえる。尚、三井物産社員によるガマ
ガエル奉納後、行方不明の人捜しや紛失物の帰還を願って、ガマガエル像を供える風が習俗化しつ
つある。ところで、一時期将門塚周辺ビルの会社員が次々と発熱して倒れるという事態もあってい
る。この時も将門塚にお尻を向けてすわっているからだということになり、窓際の間人は机の向きを
変えるという処置を先ず日本長期信用銀行がとり、三和銀行、次いで三井物産もそれにならって同様
の処置をとった。

昭和六十二年五月十九日付『朝日新聞』夕刊に、「将門復権」と題する記事があり、昭和五十九年
に主祭神として復座を果たした将門霊神（三の宮）の神殿が完成したのを報じるとともに、「おシリを
向けてシツレイ、大手町の首塚、それでも企業手厚い扱い」と題する次のような内容の記事が掲載さ
れている。⁽²⁸⁾

平将門の「首塚」はビル街の真ん中、千代田区大手町一丁目一番一号、に鎮座している。西と
北側が三井物産、東側が日本長期信用銀行、道路を隔てて南側に三和銀行。「将門塚保存会」には、
これらの企業が名を連ね、手厚い扱いを続けている。

四年ほど前までは、周辺の会社で「首塚にしりや背を向けて座るとたたりで病気になったり、

左遷されたりする」といった話も伝えられ、窓に向かうように机を置いた会社もあつたほど。だが、近年は、さすがに、そうした話は消えた。「高価な土地に、限られたビル面積。社員も増えたので、そう都合よく机の配置はできません」（日本長期信用銀行）。「個室の幹部や、会議室で座る場合などに気にする人はいるようですが、会社としてはありません」（三井物産）、「ビルの構造上、どうしても、幹部が窓を背にするようになります」（三和銀行）云々。

この記事によれば、将門塚に対する意識は十数年前ほど強くないという、しかしながら、日本長期信用銀行のように、毎月一日はお祭りは欠かさず執行する、という所もあり、また出勤時や昼休みなどに参拝するサラリーマンやOLが多く、お賽銭や生花は跡を断たない。事あるたびに崇りを発現させてきただけに、その与える心理的影響力は今もって衰える気配はないといえよう。尚、現在秋の彼岸期間中に塚前祭が行なわれ、日本長期信用銀行（あるいは三和銀行）の講堂にて例祭がとり行なわれる。この時は「七人武者」の掛幅が掲げられ、塚周辺にある九つの法人参与は必ず参加し、また毎年およそ百人余りの崇敬者が参列しているのである。

三 道灌塚の信仰とその祭祀

(1) 伊勢原市の首塚・胴塚

太田道灌（一四三—一八六）は室町時代の武将、江戸城築城で有名であり、また鎌倉五山無双の学者としても知られている。文明十八年七月二十六日、主君の扇谷上杉定正の相模糟屋館（神奈川県伊勢原市）で誘殺された。⁽³⁵⁾享年五十五歳。墓は上糟屋の洞昌院にあつて胴塚と呼ばれている。一方、下糟屋の大慈寺には首塚といわれるものがある。太田道灌の墓と称されるものには、このほか伊豆玉沢の妙法寺、東京平河町の法恩寺、日暮里の本行寺、鎌倉扇ヶ谷英勝寺裏の源氏山、埼玉県越生町の龍隠寺など数ヶ所にあると言われるが、⁽³⁶⁾未調査である。ここでは伊勢原市上糟屋の胴塚と、下糟屋の首塚について報告したい。

『新編相模國風土記稿卷四十四、村里部、大住郡卷之三』に、

○洞昌院

蟠龍山公所寺

公所は、寺邊の字なり

と號す、曹洞宗、

津久井縣根小屋村、功雲寺末

開山崇旭、

長祿二年三月十五日卒

中興陽室照寅、

天文八年七月二日卒

開基は、太田左衛門大夫持資入道道灌

文明十八年七月二十六日卒、法名洞昌院心圓道灌

なり、釋迦を本尊とす、



写真3 道灌の胴塚 (伊勢原市上糟屋)

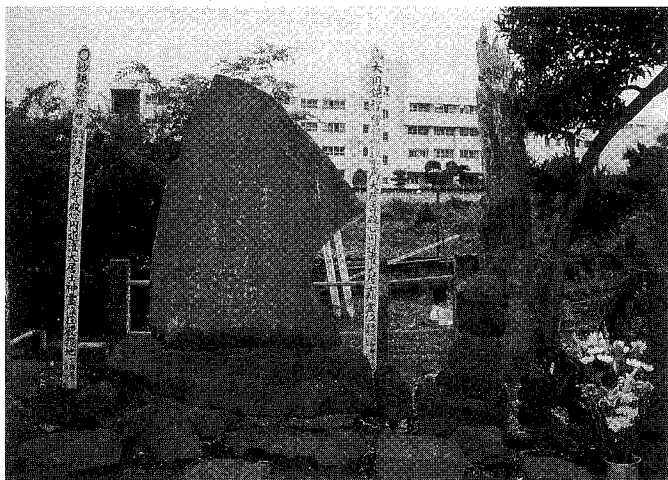


写真4 道灌の首塚 (伊勢原市下糟屋)

とあつて、洞昌院が道灌の開基であることが知られる。次いで通称胴塚について、

△太田道灌墓 大輪塔、高三尺五寸許傍に古末一株一は圍一丈六尺、一は一丈あり、按ずるに、石塔の様當時の物にあらず、後世建し物と見ゆ、下村淺間社別當大慈寺にも、道灌の墳墓あれど、當院に埋葬せし事基證〔寛永系譜〕其あり。下文に註す。

と記した後で、その凄惨な死について次のように伝えている。⁽³⁷⁾

文明十八年七月、讒言に依て、當所定正の館館嶺の事下條にありにして誅せられ、當院に葬す、〔寛永譜〕日、七月廿六日、相州糟屋定正が館に入て卒す、五十五歳、秋山上糟屋洞昌院に荼毘す、〔小田原記〕日、七月廿六日、願谷殿定正相州糟屋へ御馬を被立、道灌を對治し給ふ、去程に道灌入道打て出たりしを、鎗にて突落し、首をとらんとしければ、道灌鎗の柄に取付て、かゝる時こそ其命の惜からめ、兼てなき身と思ひしらずば、唯忠のみ有ながら、道灌の一朝に讒言せられて、百年の命を失ふ、云々 〔中略〕、今も毎年太田氏より禮奠あり、

一方、下糟屋の大慈寺と首塚についての記載は次の通りである。⁽³⁸⁾

○大慈寺 法雨山と號す、本寺前開山覺智、貞治五年六月十三日卒、中興開山東勝、中興開基太田道灌文明十八年七月廿六日卒、法名

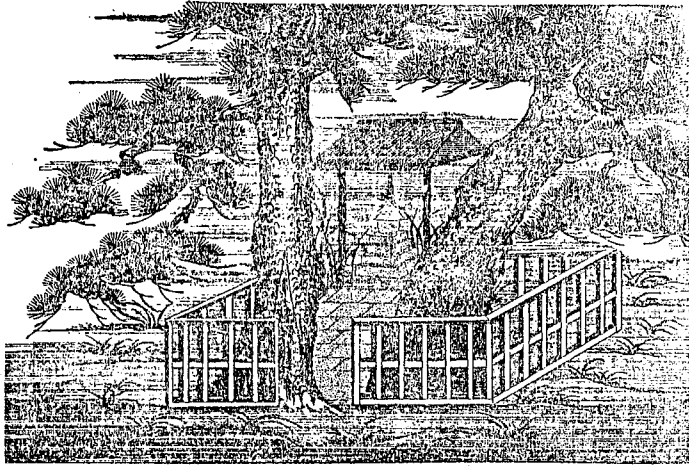


図5 太田道灌の墓（胴塚・伊勢原市上槽屋『新編相模國風土記稿』より）

大慈寺心圓道灌、按するに、此寺號を稱ふるは當寺のなり、
みにて、上村洞昌院及系譜等、皆洞昌院を號とす。

按ずるに、先住東陽實政十年三月六日卒が詩文遺稿

中に、當寺小鐘の序銘あり、是に據れば、

古は鎌倉に在しを、道灌此地に移して再

興し、其叔父周巖天文四年七月十三日、武州足立郡藤波村密教院に卒、叔悅禪師と謚

す、を講じて、中興開祖とせしなり。云々

○太田道灌墓 村西白田中に在、五輪塔三

基中央一基は、長四尺、左並ぶ、中央の一基、

即ち道灌の印なり、左右二基は、傍に榎の大

樹圖八尺六寸立り、毎年七月、太田氏より禮奠

あり、道灌墳墓の事、上村洞昌院條に詳載す。大慈寺持、

上槽屋の胴塚は一段高い土壇に木製の祠があり、
その中に石塔が立っている。墓の前には大きな
松の切り株が二つあって、周囲の景観を除けば

『新編相模國風土記稿』「太田道灌墳墓圖」とさしたる変わりはない。さて、胴塚の祭祀はどのように行なわれているのだろうか。昭和十一年に高部屋村・糟屋村協力のもと、四五〇年祭が行なわれた。その内容は不明であるが、この四五〇年祭前後までは、学校行事として小学校の生徒が七月二十六日の命日に墓前にお参りしていたという。現在太田道灌公顕彰奉賛会（二十五年ほど前に結成された。会員一〇〇名）主催で、命日前後の日曜日、道灌忌を開催している。太田道灌の末裔、家臣の子孫、道灌研究者、郷土史家が参列し、尺八を奏上した上でご焼香をし、研究会を開くというのがその内容である。尚、道灌忌の会場はおよそ十五年前から本堂ではなく三徳殿で行なわれるようになった。

この三徳殿の命名は、北條早雲が明応三年（一四九四）に相模國御霊社に道灌公を太田三徳命（智・仁・勇の三徳）として合祀したことに由来するといわれている。尚、この三徳殿には、表に「當院開基洞昌院殿心圓道灌大居士不退位」、裏に「文明十八年丙午年七月廿六日 廿二世代再興」と銘打った大きな位牌が安置されている。洞昌院の廿二世は明治二十三年没とのことであり、近世末から明治にかけて新しく作られたものと考えられる（寛永、天保期に火災に遭っている）。

また、洞昌院の北方に上糟屋の鎮守社山王社があり、文明十八年に道灌が暗殺された時、七人の従者もこのあたりで討死にたとされておられ、社地の一隅にある七人塚が彼等を葬ったものだといふ。今でもその子孫達が七人塚を祀り、道灌忌にも参加している。

一方、下糟屋の首塚は大慈寺の門前を流れる洪田川の傍にある。「塚」としての痕跡は全くなく、

整地された公園の一角に祠があり、その中に顕彰碑と並んで五輪塔があるだけである。しかも五輪塔よりも、道灌の功績をたたえる顕彰碑の方が目立ち、主客転倒した感じさえする。上糟屋の胴塚同様、昭和十一年の四五〇年祭は盛大に行なったようであるが、それ以外に何か行事をしていた様子は伺われなかった。近年は桜の名所として知られ、しかも老人会が清掃していききれいなため、お花見のシーズンには近在の人々が夕方からグループ毎にやってきて賑やかしていくようである。芝居を演じたり、どこの主催かはつきりしないが講演会を行なうこともある。一応道灌公をお祭りするという意識もなくはないが、どちらかといえは心ある人が個人で花を手向けたり手を合わせたりする程度で、娯楽的色彩が濃い。従って崇りといった認識も無いように見受けられる。

ところで、大慈寺の檀徒が中心となってまとめた『太田道灌の遺跡について』なる小冊子があり、その中に昭和十六年に八十六歳でなくなった鈴木春吉氏からの聴き書きが掲載されている。それは明治初年頃の太田家と大慈寺（首塚）、洞昌院（胴塚）との関係を物語るもので大変興味深いものである。

私が十三、四才の時分でした。丁度大慈寺に手習いに通って居った頃です。毎年例として江戸の太田家から七月十五日に道灌公のお墓に代参がこられました。士一人、それに文持一人、代参の士というのは大抵出世前の方で二本ざし、両掛の文持に桔梗の紋の合羽が打ちかけてありました。江戸からずつと草鞋がけで青山街道を歩いて来られた代参は先ず大慈寺へ入られます。お

着は午前十一時頃で直ぐ靈前に参拝せられました。つづいて読経があげられ太田家からのつけ届け金子三〇〇匹が白木の三宝にのせて供えられました。入浴がすんでお昼にはまずお酒が出て次に本膳、お平つぎの精進料理、その時私が一人お給仕を言付けられました。しばらく休憩後、上粕屋の洞昌院の方にお立ちになります。洞昌院の方では金子を一〇〇匹あげられ、夏の暑い時分なので西瓜を一つわられてお休みになるだけなのが例となりました。その足ですぐ大山へ参詣なされて其の日は伊勢原泊り、次の日が藤沢から江の島、鎌倉の御見物、それから江戸の方へお帰りになったものです。

これによれば、江戸の太田家から少なくとも明治の始めまでは、命日に近い頃両寺院に使いの者がやってきていたことが判明する。また、同文の後続の記載によれば少なくとも明治九年までは太田家から何がしかのつけ届けが贈られてきたとのことであるが、その後はさる事情で途絶えてしまったようである。⁽³⁹⁾ いずれにせよ『新編相模國風土記稿』の洞昌院・太田道灌の墓、あるいは大慈寺・太田道灌の墓の条に「今も毎年太田氏より禮奠あり」「毎年七月、太田氏より禮奠あり」といった慣例が、明治の初期まで続いていたことがわかる。それも途絶えたのだが、昭和三十一年より伊勢原町が地域おこしの一環として「道灌祭」を開催するようになった。伊勢原市の歴史的シンボルとして当地ゆかりの太田道灌を前面に押し出し、しかも首塚、胴塚への墓参・墓前祭がイベントの一つとして組み込

まれた。そして、このイベントにやがて、お役所の重立ちとともに、慣例にならって(?) 太田氏族も参加するようになったのである。

(2) 伊勢原市の観光道灌まつり

『広報いせはら縮刷版第一巻』によりながら、道灌祭発足の経過を辿ってみたい。⁽⁴⁰⁾

昭和三十一年七月に、伊勢原町と太田道灌公遺跡保存奉賛会主催のもと洞昌院にて道灌四七〇回忌墓前祭が行なわれた。その内容は読経・追悼文の朗読、大山阿夫利神社楽士四人による雅楽演奏の他、大慈寺等道灌公関連霊地巡拝を行なう、といったものだった。またこの日は江戸城築城五〇〇年墓前祭も合わせて行なわれた。記念式典、大和舞・巫女舞奉納の他、駅伝大会その他のイベントも催された。そして昭和三十三年には、商工祭、七福神祭、道灌祭と別々に行なわれていたものが「七福神祭」として一本化されることになった。十二月一日から三日まで、大慈寺と洞昌院での墓前祭、観光物産会、七福神踊りパレード等々のイベントが繰り広げられた。

昭和四十三年には「七福神祭」から「観光・農業まつり」と名称が変更され、さらには昭和四十六年には市政施行を記念して「伊勢原観光道灌まつり」として装いを新たにし、日程も十月の第一土、日曜に繰り上げられた。平成六年で第二十七回を迎えたが、この時行なわれたイベントは主に次のようなもので、太田道灌公鷹狩り行列、北条政子日向薬師参詣行列をはじめ、子供から大人まで各年齢層毎

のパレード、そして内容も鼓笛隊から囃子のパレードに至るまでと盛り沢山である。さらに諸武道大会・特産品の販売等々、道灌公の供養や遺徳を偲ぶ墓参、墓前祭は影に隠れ、観光面での宣伝効果をねらったイベント、娯楽的イベントが圧倒的な数を占めるようになった。

尚、道灌公の墓参、墓前祭は、当初洞昌院だけで行なわれていたが、「胴の供養をするなら、肝心の首の供養を」という大慈寺側の申し出により、途中から両方で行なうようになった。片方へ先ず墓参と称して出向き、次いでもう片方では墓前祭を行なう、これを隔年毎に交替するというもので、墓参と墓前祭の内容は略式か丁寧に儀礼を行なうかの違いしかない。いずれにしても結果的には、胴は首を求め、首は胴を求めるといふ恰好で双方でセレモニーが行なわれることに落ちついた訳である。

結びにかえて

伊勢原市上糟屋の洞昌院は道灌開基とされ、下糟屋の大慈寺は道灌を中興の祖としていることから、両寺院に道灌を祀る石塔があつても何ら不思議はない。しかし、片方を胴塚と称し、もう一方を首塚と称するに至つた経緯は不明である、地元の人はいづからかそう呼び分けているが、それに関する伝承はない。またその祭祀だが、近世から近代初期にかけては、江戸（東京）の太田家から使いが両寺に出向き、祭祀を行なつていたようである。しかし、明治九年にそれも途絶えた。それ以後の祀り方

はわからないが、戦前の四五〇回忌あたりまでは、かなり政治的意図のもとに祭祀が執行されてきた。戦後になると一変し、個人的に花を手向けたり、手を合わせる人がいた程度であるが、首塚周辺が公園として整備され花見の場所になるに及んで、四月には多くの人々で賑わうようになり、回向と娯楽を兼ねて芝居をここで上演するようになったという。そうしてやがて、行政主催のイベントの中で洞昌院にて墓前祭が行なわれるようになる、大慈寺側も積極的に働きかけ、その効あつて墓前祭と墓前祭が交互に隔年で行なわれるようになり、現在に至っている。

胴塚の方も四五〇回忌云々については首塚と同様であるが、こちらは道灌公霊跡保存奉賛会（あるいは道灌公顕彰奉賛会）を結成し、その保存につとめるとともに、遺徳をしのぶ行事を積極的に行なってきた。いづれにせよ両塚とも戦後はそれぞれに地元の人の手によって保持され、祀られてきたのである。ところが、昭和三十年代以降、伊勢原町から伊勢原市へと発展する中で、上糟屋・下糟屋両地域のシンボルにしかすぎなかったものが、行政の手によって伊勢原町（あるいは市）全体のシンボルとして担ぎ出され、地域活性化と住民のアイデンティティ獲得の手だてとして重要な役割を負わされるようになった。こうした経緯を見ると、首塚・胴塚の主である道灌は、その時々の政治的条件の下で、その都度新しい目的に役立つようにアレンジされながら、行政・政治に利用されてきたといえよう。一方、神田明神の主祭神、将門についても同様なことがいえる。近世における幕府あるいは朝廷の対応、近代初期の教部省の姿勢等々がそのことを端的に示している。

一方、千代田区大手町の将門塚は中世来崇りの発現がしばしばあったとされ、その都度祭祀が行なわれてきた。天慶の乱が古来稀に見る、まだショックな事件だっただけに次々と伝説を生み、またそれらが文芸作品となりさらには芝居となって上演され続けてきた。また錦絵としても描かれ人々にその存在をアピールしてきた。その結果将門に対する強烈なイメージが、人々の脳裏に植えつけられ、崇りの認識を育んできたといえよう。特に近代以降の将門塚は大都市の下真中にあり、常に開発の波にあらわれてきた。そうして崩壊の危機に際しては、必ずといって良いほど崇りが発現した。即ち人々は開発と称して幾度ともなく塚の切り崩しにかかったが、その都度天変地異がもたらされ災厄がふりかかってきた。それをタブーの侵犯によるものと判断し、その慰霊にやつきとなった。この崇りの認識こそが、合理主義の象徴としての高層ビル群の中に、摩訶不思議な塚を維持する原動力となったと考えられる。

尚、屍体分葬伝説との関係でいえば、伝説が各地で生成・発展していく過程で、特定の偉人の腹・足・首などの身体の各部位を埋めた塚と想定されていたものがほとんど考えられ、御霊信仰が大きな影響を与えていることは確かなものの、中山が主張するように、築塚当初から御霊の祟りを恐れて実際に分葬されたことと確定することは難しい。但し、首とその他の部所との二つの分葬は当然ありえることである。しかも「歌い骸骨」の伝説や、将門、鳥取郡萬等々の伝説から、首は生命力の象徴と見なされていることは確かであり、従がってそれを切り落として身柄と分離することにより、その復

活を阻止したとの考えは全く否定されるものでもない。というよりも、むしろ逆に首に対する特異な認識がこうした伝説を生み出したと考えた方が良いかもしれない。いずれにせよ伝説と史料とをつき合わせながら検討していく必要がある。

〈付記〉

本稿は日本民俗学会第七四回談話会（一九九四年十一月）において発表した内容を一部加筆修正したものである。尚、執筆に当たっては、田中宣一教授、大慈寺、洞昌院の住職及び神田神社氏子総代遠藤達蔵氏、権禰宜清水祥彦氏より多大なご教示とご便宜を得た。また院生の小澤広智、学部生の前田俊一郎、関東朋之の諸氏には資料の収集等の手を煩わせてしまった。末尾ながら記して深謝申し上げる次第である。

註

- (1) 大場磐雄「歴史時代における『塚』の考古学的考察」（『末永先生古稀記念古代学論叢』末永先生古稀記念会刊 一九六七年 一六一―一六七頁）。
- (2) 坂詰秀一「『塚』の考古学的調査・研究」（『月刊考古学ジャーナル』第二七四号 一九八七年 二頁）。
- (3) 神奈川大学常民文化研究所編『十三塚―現況調査編』平凡社 一九八四年。同『十三塚―実測調査・考察編』平凡社 一九八五年。同『富士講と富士塚―東京・神奈川』平凡社 一九七八年、他多数。

- (4) 柳田國男「十三塚」(『考古学雑誌』一一四 一九二二年)、同「塚と森の話」(『斯民』六一〇・一一・一二 一九二二年)、同「七塚考」(『郷土研究』三十四 一九二六年)、同「七塚考」(『郷土研究』三十五 一九二六年)。
- (5) 柳田國男「民俗学上に於ける塚の価値」(『中外』二一八 一九二九年)。
- (6) 平野栄次「塚の信仰」(『考古学ジャーナル』第二七四号 一九八七年 四一七頁)。
- (7) 拙稿「行人塚再考」塚をめぐるフォークロア」(『日本常民文化紀要』第一七輯 成城大学大学院文学研究科 一九九四年 四三―八九頁)。
- (8) 遠藤秀男「日本の首塚」雄山閣 一九七三年 一―三四五頁。
- (9) 遠藤秀男「日本の首塚」前掲論文 二一―二六頁。
- (10) 黒田日出男「首を懸ける」(『月刊百科』三一〇号 平凡社 一九八八年 一三―一八頁)。
- (11) 黒田日出男「首を懸ける」前掲論文 一八―二二頁。
- (12) 柳田國男「一目小僧その他」(『定本柳田國男集』第二卷 筑摩書房 一九六八年 二〇二―二〇三頁)。
- (13) 柳田國男「七塚考」前掲論文一―一〇頁。
- (14) 中山太郎「補遺日本民俗学辞典」梧桐書院 一九三五年 七九―八一頁。
- (15) 梶原正昭・矢代和夫「将門伝説」民衆の心に生きる英雄」新説書社 一九六六年 一―三六七頁。
- (16) 福田豊彦「平将門の乱」岩波新書 一九八一年 二〇八頁。
- (17) 後藤丹治・釜田喜三郎校注「岩波古典文学大系 太平記 二」卷一六「日本朝敵ノ事」岩波書店 一九六一年 一六八頁。
- (18) 福田豊彦「平将門の乱」前掲書 二〇八―二二四頁。
- (19) 朝倉治彦編「日本名所風俗図会四・江戸の巻Ⅱ」角川書店 一九八〇年 三一〇頁。

- (20) 織田完之『平将門故蹟考』一九〇七年。
- (21) 朝倉治彦編『日本名所風俗図会四・江戸の巻Ⅱ』前書二六頁、四〇二―三頁。
- (22) 中山太郎『将門の首塚』(中山太郎『日本民俗学・随筆篇』大和書房一九七七年 六頁)。
- (23) 『神田神社史考』神田神社史考刊行会 一九九二年 一四四頁。
- (24) 『新聞雑誌』第一九八号 一八七四年。
- (25) 『郵便報知新聞』第四五五号 一八七四年。
- (26) 神田明神本殿前に明治天皇臨行記念碑がある。但し昭和十五年に建立されたものである。
- (27) 『時事新報』一九八四年九月十六日付記事。
- (28) 佐伯有清・坂口勉・関口明・追塩千壽『研究史・将門の乱』吉川弘文館 一九七六年 一―三三三頁。
- (29) 織田完之『平将門故蹟考』前掲書。
- (30) 『東京朝日新聞』一九二八年三月二七日付記事。
- (31) 『報知新聞』一九二八年三月一五日付記事。
- (32) 遠藤達威氏ご教示による。
- (33) 宮本袈裟雄『民俗觀念としての「崇り」覚え書』(『下野民俗論纂』下野民俗学会 一九九三年二一五―二一八頁)。
- (34) 『朝日新聞』一九八七年五月一九日付夕刊記事。
- (35) 『国史大辞典』第二卷 吉川弘文館 一九八〇年 六三〇―六三二頁。
- (36) 伊勢原市教育委員会『史蹟と文化財のこのまちを語る』一九七一年 二七頁。
- (37) 『大日本地誌大系一五・新編相模国風土記稿』第二卷 雄山閣 一九六二年 三六九―三七二頁。
- (38) 『大日本地誌大系一五・新編相模国風土記稿』第二卷 前掲書 三七四―三七五頁。

- (39) 高橋明編『太田道灌公の遺跡について』私家版 一九八六年。
 (40) 『広報いせはら縮刷版』第二巻 伊勢原市役所 一九八三年。

〈参考文献〉

- (1) 折口信夫「餓鬼阿彌蘇生譚」(『折口信夫全集』第二巻 中央公論社 一九六五年 三四一―三五二頁)。
 (2) 南方熊楠「千人切りの話」(『南方熊楠全集』第二巻 一九七二年 四四五―四五五頁)。
 (3) 小川直之「斬首の民俗―廃仏毀釈と石仏―」(『西垣晴次先生退官記念宗教史・地方史論纂』刀水書房 一九九四年 二九五―三〇五頁)。
 (4) 神山弘「怨念の将門」エントナープライズ社 一九八九年 一―二四四頁。
 (5) 田村勇「斬首論」(『歴史民俗学』第一号 批評社 一九九五年 六―三二頁)。